ケアに関する教育学的考察
――教師におけるケアリング――

杉　山　直　子

要　約

20 世紀末から、ケアに関する研究が様々な領域で行われている。しかし、ケア・ケアリングの各領域での共通概念や独自性は、十分解明されているとはいえない。本論文では、ケアの必然性、ケア・ケアリングを整理するとともに、ケア・ケアリングにおける教育における独自性について考察し、その意義を明らかにすることを試みる。

キーワード：ケア　ケアリング　メイヤロフ　教師論

はじめに

「教師は、教え子に片思いである。」と、私はいつも思っている。絶えず、何が今必要か、どのようの学び方を学ぶべきかなどを考え、一人ひとりの学生を想起している。しかし、学生はそのように考えられているとは露とも思わない。だからこそ、教育活動は成立する。「片思い」は本人の意思を尊重し、教師は支配者ではないという教育の姿の表現でもある。そもそも、教師は、単純に知識・技能を伝えることのみがその仕事ではない。知識・技能やその意義や用い方までを、対象である教え子の人格に組み込むように、再創造するように、自己活動を引き起こしつつ、伝えなければならない。そのために、教え子を理解することが求められる。教育内容の捉え方や教え方や具体物などや、各々にまさに今必要なことを、絶え間なく変化・発達する教え子をいつも頭におき、集団の発達とともに、絶えず頭の中や心の中に住まわせている。このことは、教育者であれば、誰もが行っていることであろう。人間が人間を教育するという本源的な部分において、必要な姿なのである。

しかしながら、こうしたことが重視されることは、今やほとんどない。計測不可能であり合理的ではない、育てた経験がないからか理解できない者も多い、教育をする者が対象者に知識・技能において優位性を持つことで誤った自己存在・自己肯定感を持つなどの現代社会の状況や教師となる者の発達課題もあり、教育活動における人間的部分がますます衰退してきている。このような状況の中、逆に人間性の部分に注目する思想は発達している。本論文では、その中の一つで

あるケアについて教育における意義を考察する。

1．ケア概念の広がり

（1）ケア概念の背景

21世紀はケアの時代といわれ、医療、看護、福祉、教育など様々な領域での共通概念として、「ケア」の考え方が広がってきている。とりわけ医療・看護で「ケア」が強調されはじめたその背景には、急速な科学技術や医学の進歩・発展があるという。科学技術の発展や合理性・効率性・経済性が重視されすぎ、そのために人間がおきざりにされている状況がその原因といわれている。教育も同様である。学校は、効率よく学力をつける場であり、学校の存在意義のために、学校の偏差値を上げるため道具として子どもが利用されることもある。受験という形で見えていた偏差値は、学力試験の全国調査により、各県・各市・各学校の順位まで明らかにされ、指導の指標にされる。計測可能な学力が重視され、子どもたちの生活もそのためのものと考えられ、学力と親の年収、学力と朝ごはん、学力と早寝早起きなどの関連が調査され、数値で把握される。さらに、効率的な学習が求められ、個別学習、習熟度別学習、コンピューターなど教育機器を用いた学習などが広がってきている。試験に出る知識や技能をインプットする学習が主となり、人間として教材に代表される文化財を味わうことや、学んだことの自分の生活や他者の生活のなかで捉えなおしや、批判的解釈など人間としての諸力の獲得や、自分の生き方や人格への組み込みや再構成などの、人間としての学びは後退しつつある。

以上のような状態への警鐘も含め、人権思想とともに個々の人間を重視する思想はさらなる展開を迎えている。個々の人間の論理、すなわちそこで生きている個々の人間、その人の価値観の根拠、その人の人生、その人がこれまで生きてきたなかでの脈絡・物語などの意味を捉えようとする考え方が広がり、ケアもこうした考え方の一つに位置づいている。

このように考えると、現代の個々の人間の人権意識は高く育てられるが、扱われる場合は組織の中に組み込まれ従うしかなく、ケアの要求は高いが実際のケアは低いという矛盾の中で現代人は生きているともいえる。それは、以下のことと関係をしているであろう。広井良典が「現代におけるケアということの大部分は、もともと家族や共同体の内部でおこなわれていたものが『外部化』されたものである、ということができる」（広井良典：2010 p.21）と述べているように、この外部化は、社会の個人化と並行して進み、「他者のことには『かかわらなくても』生きていけるような社会となり、そうであるがゆえに、逆に他者に対して何らかのかたちで関与したり働きかけをおこなっていくことは、いわばより『自発的』な、積極的な行為となる」（広井：2010 p.29）ことが要求される。確かに、現代社会において、ケアは、医療、看護、福祉、教育などといった分野で職業へとなり、制度を伴うかたちになった。教育においても、家庭や共同体からよ

り大きな枠組みのなかで、考えられるようになり外部化が進んでいる。また、一人の人間を分野で分けるのではなく、それらの重なりや独自性を捉えるうえで、ケアは重要な役割を持つ。例えば、中山は、福祉と教育の重なる学童保育においてケア実践をとらえ、福祉的ケア、教育的ケアと分けることで、ニードに応じた対応を明らかにしようとしている。(中山芳一：2008)

現代の課題は、職業になることで制度・組織、領域に分かれ、発展すればするほど本来の意味が薄れ、行為者にとって仕事内容をこなすことが最大目標となり行為者中心になってきていることである。さらに、その行為者も経済・政治などの大きな枠組みに組み込まれ、人間としての自分の位置づけさえも見失われている状態が、現在の問題なのである。

（2）ケアの語義

では、ケアとは、どのようなことを意味するのか。まずは、語源的背景をみてみよう。ケアは、広辞苑第6版によれば、「①介護。世話。②手入れ」である。確かに、ケアといえば、ケア・マネージャー、ヘア・ケアなど人やものを世話する意味合いが強い。英語 care の意味は、ジーニアス英和辞典によれば、「1、a 世話, 介護；保護；管理, 監督. b《英》＝childcare. 2（細心の）注意, 用心（深さ）；努力. 3 a 心配, 気苦労, 気がかり；不安, 懸念. 4《主に英正式》 関心事, 注意すべき事［人］, 責任を持つ事［人］.」である。以上のことから、ケア care は、人間にとってある対象があり、その対象（人やもの・こと）に対して関心があり気がかりで心を占めている状態があり、その対象に「配慮、気遣い」をし、世話をすることといえよう。このように捉えると、ケアは広義から狭義まで、次の3つの意味を持つことを示すであろう。第1の意味は最も広い意味で、関心、気がかりといった対象が心を占める専心であり、第2の意味は対象への物理的援助・働きかけである「世話」に相当するような意味であり、そして第3の意味は最も狭義の医療や福祉といった職業・専門分野での意味である。

教育は英語で education であるが、ヒトの人間性を引き出し人間へと育てる意味である。ラテン語の educare から生まれたこのことばは、もとは植物の栽培や動物の飼育の意味であり、人間の子どもを育てる養育の意味となった。この educare のなかに care が含まれているが、栽培や飼育、養育もすることはまさに、対象に関心があり気にかけ心配し世話をし、各々に特徴に合わせ育てることである。教育は、歴史の発展とともに、その時代・社会での行動様式、文化・科学などの知識や技能の獲得を通すことにより人間性を引き出すという意味となってきた。現代では教育は制度化、体系化、組織化されているが、しかし、人間と人間が向かい合う関係性のなかで成立する。教育を行う者は、教育を受ける者について、考え、心配し、注意を払い、世話をする。すなわち、教育活動において、ケア care を考察することは、その本来的な意味を捉えるうえでも、重要な意義を持つ。

（3）人間の本源としてのケア

ハイデガー『存在と時間』に、ローマ神話の関心の女神クーラ（cura）にまつわる寓話の紹介がある。以下はその寓話である（ハイデガー　桑木務訳：1976 p.136-138)。

「クーラが河を渡ったら　かの女は粘土の土地を見た
思いにふけって土をとり　おのずとひとりで捏ねはじめ
何を造ろか思案すりゃ　そこにジュピターやってきた
捏ねた粘土に精神(こころ)をと　かの女の願いをかれは聴く
自分の造ったその像(かた)に　かの女はクーラと名をつけよう
ジュピターこれを遮って　おのれの名を言い張った。
ふたりが名付けで争うと　大地(アルス)も立って言うことにゃ
像にはおのれの名をつけよ　像に頒(わ)けたこの体
訴え聴いたサトゥルヌス　もっともらしく判決(きまり)をいう
精神(こころ)を与えたジュピターは
それが死んだら精神(こころ)をば
体を与えたテルースは　そのとき体を受けとれよ
クーラが創めたその生きもの　生きているうちはおまえのもの
さてさてみんなの争いは　名前に因んだことだから
その生きものをホモと呼べ　それは土(アルス)で造られた」

人間を土から創ったクーラは生きている間は人間を支配し、死んだらジュピターが精神を受け取り、大地に肉体を戻す。クーラ（ラテン語　cura）とは、ギリシア語に遡り、関心(ゾルゲ)（ドイツ語 die Sorge）と英語の concern とともに英語 care の語源であるという（ハイデガー：1976 p.345)。精神と体を持つ存在である人間が生きている間、すなわち「この世に在る(イン・デア・ヴェルト・イスト)」かぎり、人間はこの根源から支配されるものなのである。ハイデガーは、「自分の居場所と定められたこの場所で他の事物や人間を気づかい、心配し、関心をもって関わっていく生きざまを人の存在根拠と考え」（石川道夫：2009 p. 9)、「この世にあること自体がこの世をケアすることと同義であり、現存在は世界をケアするはかない存在」（葛生：2011 p.106）なのである。このようにケアは人間に本源的なものなのである。

確かに、人間は、誕生をしてまもなく自己のまわりの環境に関心を持ち、ものや人に働きかけつつ学び取り、発達をしていく。その意味で、関心を持つものを持ち、それをケアする。また、親などにケアされて共通の体験を持つことにより、行動様式や言葉などを模倣し、二足歩行をし、言葉を用い、思考し、人間の基本を身につけるのである。発達や状態に応じてケアの対象は変化し、ケアを受け続け、ケアをし続ける存在でもある。

ノディングズは、このような人間の姿から「ケアすることとケアされることは根本的な人間の

ニーズである」とも述べている（ネル・ノディングズ　佐藤学監訳：2007 p.11)。その他、ケアの研究者は、人間とケアに関してどのように考えているのであろうか。葛生によれば、このようなケアの本源性を主張する論者として、ゲイリン(Willard Gaylin)、ローチ(Simone Roach)、メイヤロフ（Milton Mayeroff）らがいるという。ゲイリンは、ケアすることが人間の本源性としてとらえ、「もし、人類の生存にとって本質的で、しかも人類特有の性質が生物学上ただ一つ存在するとするならば、それは、ホモ・サピエンスは本源的に他者を愛し、ケアする動物だということである。」と述べている。ローチは、ケアすることは人間の本源であり、さらにアイデンティティであるととらえ、「ケアリングは最も普遍的で揺るぎない人間たることの尺度である。ケアリングは人間の本源すなわち humankind at home であり、人間本来の姿になること、そして自分自身になることなのである。」と述べている。さらに、メイヤロフは、「人はみずからの占める位置を見出すことによって自己を見出すが、その占める位置とは、ケアを求める他者、ケアすべきだと感じる特定の他者を見出すことによって見出されるのである。ケアすること、ケアされることを通じて、人はみずからを自然の一部として経験する」ことを述べ、自己のアイデンティティ確認が他者からケアを受けたり、他者をケアしたりというケアリングの関係を通して行われていることを指摘している（葛生：2011 p.107-108)。このように、人間が人間であるということにおいて、その本源において、その要求において、その存在価値において、ケアは人間には切り離せないものなのである。

2.「ケアすること」の意味

（1）ケアリングの意義

ケアをすることとして、ケアリング（caring）という表現が用いられている。ケアリングは、ケアの動態であり、過程であり、ケアをしているそのものである。

石川道夫は、「ケアリングは、ケア（care）からの派生語であるにもかかわらず、ケアのように『世話、保護、配慮、悩み事、骨折り』といった対人関係的な援助・支援だけではいい尽せないような言葉の広がりと語感を伴っている」ことを述べている。そこには、責任や役割を自然に引き受けるイメージや環境や自分たちの居場所との包括的一体感といったイメージがある（石川道夫：2009)。人間がまさにケアをしている状態の心や思考や身体が統一的に対象に向かい、対象の論理を図り気遣い関わる状態である。このようなケアすること＝ケアリングをケアとの違いを明確にしつつ、明らかにしていく。

（2）ケアとケアリング

城ケ端初子によれば、ケア・ケアリングの概念については、看護の領域でとりわけ発達してき

たが、様々な見解があり、統一的な見解には至っていないようである。例えば、ケアリングは看護の中心概念である、いやケアリングは過程であり概念ではないという論争や、ケアリングは看護そのものという考え方から、社会への奉仕者である者にとっては誰もが期待する一般的なものという考え方まで存在するようである（城ケ端初子編著：2010)。そのなかで、看護におけるケアの研究をしているマデリン・レイニンガー（Madeleine M. Leininger）やジーン・ワトソン（Jean Watson）のケアとケアリングのとらえ方をみてみよう。

レイニンガーは、「ケアは現象であり、ケアリングは行為である」ととらえている。レイニンガーは看護の領域において、1970年代中頃、ヒューマンケアという文化運動が普及し始めるまで、ケアはそれほど重視されていなかったことや、その後においても、女性的すぎるとか、非科学的であるとか、医療を援助する看護の効率化に対するなどの理由で、必ずしも看護の中心にはならなかったことを述べている。それとともに、ケアとケアリングの意味は曖昧かつ暗示的であり、系統的かつ厳密に研究される必要があることに気づく。彼女のケアとケアリングの定位的定義によれば、「ケア（名詞）とは、人間の条件もしくは生活様式を改善したり高めようとする明白なニードあるいは予測されるニードをもつ個人に対して行われる援助的行動、支持的行動、あるいは能力を与えるような行動にかかわる抽象的・具体的現象を意味する。」そして、「ケアリング（動名詞）とは、人間の条件や生活様式を改善したり高めようとする、あるいは死に対処しようとする明白なニードあるいは予測されるニードをもつ個人あるいは集団を援助したり、支持したり、あるいは能力を与えたりすることを目ざす行為および活動を意味する。」このようにケアは抽象的・具体的現象であり、ケアリングは行為および活動であり、個人のみでなく集団がその対象ともなりうる。（マデリン M. レイニンガー　稲岡文昭監訳：2009 p.51）

レイニンガーの同僚でもあるジーン・ワトソンは、人間科学として看護をとらえる「ヒューマン・ケアリング理論」の研究をしたが、ケアは看護の本質として表現された行為をもとに語られ、ケアリングはその行為の基盤となる心や魂に焦点をあてている。ケアリングは、人間の主観的な営みであり、心・身体・魂の3分野に反映されるものであり、さらに、人をケアするということは、他者の世界のなかに入ることを許される相互依存の関係にもとづくものである。その立場であるジーン・ワトソンによれば、看護におけるケアは「行為」、ケアリングは「態度や心」であり看護の本質であるとする。そして、ワトソンのケアリングは「真の心と魂のケアリング」がもっと必要とされる。（ジーン・ワトソン　稲岡文昭・稲岡光子訳：2009 p.155）彼女の考え方は、まさにケアをしている者の内面を重視したとらえ方であり、その主体的な表現として行為よりも内面を重視している。

以上から、ケアとケアリングについてその違いをまとめると、ケアは、レイニンガーの言うように抽象的であり、例えば、教育政策や教育課程などの体系的・組織的な場合に用いられる用語であろう。しかしながら、ワトソンの言うように、ケアというその性格上、実際のケアリングを

考慮した具体的現象としてとらえるべきである。ケアリングは、ケアの過程であり、具体的なかかわりであり、人が人を、○○さんが□□さんを、ケアする、ケアしているという実際の状況を考慮したものである。それ故に、ケアされる対象への心や構え、態度など対象への内面や身体性の方向性をもとらえた主体の状態の意味をもつ。教育においてケア、教師の教育活動においてケアリングと用いることが妥当であろう。

3．教育におけるケア・ケアリング

（1）教育におけるケア・ケアリングの独自性①―機能と対象―

看護・医療の分野では、ケアと密着不可分な関係を持つキュア（cure）と対比させ、看護・医療活動の分析を行っている。看護と医療においてのケアは、その機能面であるキュアとの関係性の中で、その独自性がみえてくる。では、教育におけるケアの独自性は何か。

教育の機能面から考察をしてみよう。教育は、その機能面において、一般的に訓育（人間性の育成）と陶冶（知識・技能の習得）に分けられるが、まず人間性を引き出す訓育において、人間的かかわりが直接的に必要である。まさに、訓育においては、ケアが中心となる。陶冶においては、訓育と陶冶が統一的に行われることにより人格形成がおこり教育は成立する。すなわち、知識・技能を習得しつつ人間性が引き出され、教育の対象者の人格へ組み換えや再創造が行われる際に、教育は成立するこのように、陶冶と訓育の機能と直接的・間接的に結びついて、教育におけるケアは大きな意義を持つ。

実際に学校でケアをする（すなわち、関心を持ち、気になり、世話をする）のは教師であり、ケアを受ける者は子ども（幼児・児童・生徒）である。教師は教育活動において、子どもに専心し、子どもの今日の姿（心の状態、知識の持ち方や認識の力など）を捉え、明日の姿（発達）を考え働きかけるのである。また、個としての子どものみならず、教育においては、学級などの子ども集団が、その対象となる。教師のケアリングの対象は個・集団としての子どもであり、個としての子どもに直接的に、集団を媒介して間接的にケアをする。以上から、さらに、教育においてはケア、教師が行う教育活動においてはケアリングを用いることが妥当であることも理解できる。

（2）教育におけるケア・ケアリングの独自性②―教師のケアリングの意義―

ミルトン・メイヤロフは、前述したようにケアする者とケアされる者の人格発達における相互作用性について示すとともに、「ケアすることを一般的に記述すること」と、ケアすることの全人格的な意義と「その人の人生にどのような秩序づけを行うかを説明すること」を目的として“On Caring”（1971）を著わした（ミルトン・メイヤロフ　田村真・向野宣之訳：2009）。その

際に、特定の領域のみではなく、どの領域にも通用するケアリングの“すべてに共通なパターン”を探究した。「親が子を、教師が学生を、精神療法家が患者を、芸術家が作品を、市民が共同社会を、夫と妻がお互いを、それぞれケアするとき、それらのケアすべてに共通する働きを、“他者が成長するのをたすけること”」であり、「ケアすることにより、空虚・絶望と意味ある達成とがどのように異なるかが、つぶさに明らかになることと、その様相を述べ」ている（p.225)。メイヤロフの一般的ケアリング論から考察し、教育におけるケアリングの意義を捉え、以下５点にまとめてみた。

①子どもの自己実現を援助する教育活動　教育活動は、教師と子どもが相互関係性を持ち、教え育てる主体と学び発達する主体となったときに成立する。しかし、教育という言葉は主体を教師にしがちであり、そうなったときに問題が生じる。ケアをするという表現は、教育活動において陥りやすい問題から遠ざける。メイヤロフは、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現をたすけることであ」り（p.13)、「相手が成長し、自己実現することをたすけることとしてのケアは、ひとつの過程であり、展開を内にはらみつつ人に関与するあり方」(p.14）であることを述べている。ケアする対象をケアされる客体ではなく「それが本来持っている存在の権利において成長すること」であり、「“それらしくなる”ことを望んでいるのである。」(p.19）子どもが「自己実現」をするということは、学び発達する主体として、なりたい自分、出来る自分、わかる自分など、自分自身の実現したい姿を意識して持っていること、個々の子どもが、その子らしくなること、すなわち個性を発見し育っていくことが“それらしくなる”ことである。

②子どもの自己実現が教師の自己実現　ケアすることとは、ケアすることを中心とし、「他の諸価値と諸活動を位置づける働き」をするのであり、「彼のケアがあらゆるものと関連するがゆえに、その位置づけが総合的な意味を持つとき、彼の生涯には基本的な安定感が生まれる。」それは、「世界の中にあって“自分の落ち着き場所にいる”」のであり、「自身の生の真の意味を生きている」のである（p.15)。このケアする人を教師に置き換えてみると、教師は子どもをケアすることにより、その人格全てをかかわらせ、諸価値・諸活動が総合的に意味を持つことで、教師としての“自分の落ち着き場所にいる”のである。

③ケアする対象としての学級集団、教育内容　メイヤロフは、ケアの対象を「特定の誰かであり特定の何かである」(p.27）とし、人間のみでとらえてはいない。新構想、ある理想、ある共同社会、観念も対象としている。教師は、学級・学校という集団・社会を望ましい学級・学校へと育てる。すなわち、ケアするのである。また、教師は、教育目的・目標に向けて、科学・文化などから教育内容を精選し、児童生徒の実際に応じた教材解釈や教材開発をして教材研究を行うが、教材がより適切なものと成っていく過程においてもケアをしている。教育内容をケアし、教材をケアし、各々がその役割を持つように育てているのである。また、自分の教育方法をケア

し、教育理念もケアしているのである。

④教師がケアする対象としての自分自身　ケアする者は、「自分自身の中の成長しようとする欲求にこたえて、自分自身をケアすることでもある。……いわば、自分自身の保護者となり、自分の人生に責任をとるのである。」(p.103) そのためにも、「自分自身を他者として感じとることができなくてはならない。」(p.104) そして、自己へのケアは、誰かがケアする必要性を理解することをも意味している。他者の自己実現が教師の自己実現であることは、決して教師が自分自身を犠牲にするということでもなく、教師も、自己実現として「自分自身が成長するように援助する」ことが重要なのである。教師は、子どものために自己犠牲になりがちであったり、或いはそうした教師が評価をされたりするが、実は違う。そのことを説明する意味で、ケアリングは大きな意味を持つ。

⑤ケアする者へと育てる教育活動　ケアし、対象の成長を援助することは、少なくともその人が、ケアの対象を持ち、ケアできるように援助することであり、その対象を発見し創造するように励まし支えることでもある。そればかりでなく、その対象が自分自身をケアするように援助することである。それは、「ケアしたいという自分自身の要求に目を閉じず、応答できるようになることをとおして、彼自身の生活に対して責任を持つように彼を援助することである。」このことは、まさに教育活動である。教師は、子どもが他者をケアするように育てる。個々の子ども同士、個としての子どもと子ども集団、子ども集団同士における相互作用のなかで、互いにケアができるように育てていくのである。また、教育内容を、子どもが自分自身が学びたいものに転化し、学びたいものを子どもがさらに発展・創造していくのである。

以上の5点において、ケアリングの共通性から、教育活動におけるケアリングの独自性を考察した。以上のことは、教育活動のあり方においては新しい視点ではない部分もあるが、対象に専心し、対象がそれらしくなるように、大切に手をかけ育てることが、人間が人間であることの意味を深く・広く捉えることで、教育が教育として、教育活動が教育活動として成立するために大きな視座を与えるものである。

おわりに

単に個の世話という狭い枠で捉えるのでなく、教育・教育活動を発展的にとらえるための視点として、ケア・ケアリングと人間との関係性を明らかにしつつ、教育における独自性を考察してきた。その際、教育におけるケア、教育活動における教師のケアリングというように分けることにより、教育・教育活動がより明確になり、ケアリングという人間としての具体的行為とそれを支える内面性や重要性が明らかになった。また、教師論において、教師自身が教育者になりうる条件を考察する可能性を持つ。その際、教育活動という行為、それを支える人間としての心など

の内面性や身体性、結果のみでなく様々な葛藤や試行錯誤の過程の重要性、教育主体の条件など、子どもへの「片思い」の重要性とそれゆえに孕む危険性を明らかにする機会にもなった。

引用文献

- 広井良典：2010『ケア学』医学書院。
- 中山芳一：2008「相互主体的なケア実践としての学童保育に関する研究―ケア実践者としての学童保育指導員の専門性―」『生活指導 NO.25』
- ハイデガー 桑木務訳：1976『存在と時間　中』岩波書店。
- 石川道夫：2009「キーワードとしてのケアリング」石川道夫・田辺稔編集『ケアリングのかたち―こころ・からだ・いのち』中央法規。
- 葛生栄二郎著：2011『ケアと尊厳の倫理』法律文化社。
- ネル・ノディングズ　佐藤学監訳：2007『学校におけるケアの挑戦―もう一つの教育を求めて―』ゆみる出版。
- 城ケ端初子編著：2010『ケアとケアリング』メディカ出版。
- マデリン M. レイニンガー 稲岡文昭監訳：2009『レイニンガー看護論―文化的ケアの多様性と普遍性―』医学書院。
- ジーン・ワトソン 稲岡文昭・稲岡光子訳：2009『ワトソン看護論―人間科学とヒューマンケア―』 医学書院。
- ミルトン・メイヤロフ 田村真・向野宣之訳：2009『ケアの本質：生きることの意味』　初版 1987 ゆみる出版。（原著　Milton Mayeroff, “On Caring”, Harper & Row、1971.）